

津布久平八郎家文書

安蘇郡田沼町大字山越の津布久平は、江戸期は旗本鵜殿氏の名主、明治期以降は戸長や町長などを勤めてきたほか、石灰山の経営も行っていました。蔵する史料は七〇〇点におよびますが、本館への寄託は四八点で、そのうちの二七点が絵画などの軸物で占められています。

寄託された文書で、特に目を引くのが豊臣秀吉朱印状(図1)、徳川家康(図2)および秀忠(図3)の御内書です。いずれも下野唐沢山城主佐野信吉に対する礼状で、折紙形

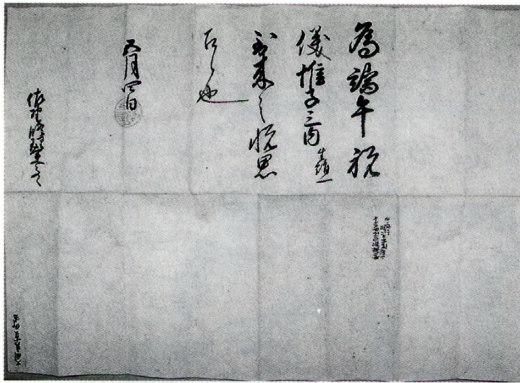


図1 豊臣秀吉朱印状(1)

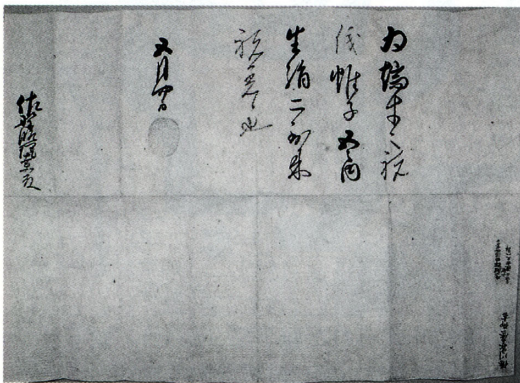


図2 徳川家康朱印状(2)

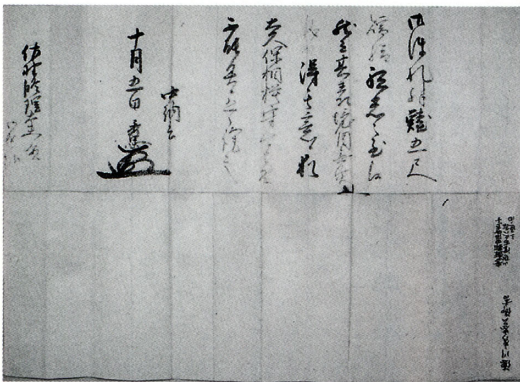


図3 徳川秀忠書状(3)

式となつています。料紙もそれにふさわしく檀紙が使用されています。信吉は秀吉の御伽衆の一人であった富田知信の子で、信種と称しましたが、天正二十年(一五九二)佐野家を継ぐにあたり、秀吉から豊臣の姓と吉の一字を賜っています。いわば豊臣恩顧の大名と言えます。ですから、秀吉没後徳川家康と石田三成との関係が緊迫した状態になるにしたがい、その去就が問われて来ます。結局信吉は徳川方に付き、石田三成と呼応した会津の上杉景勝の南下を

阻止する役目を負ったようです。それは、図3の秀忠の書札に鯉五尺(疋)を贈られた返礼のあと、会津の境目である佐野近辺に異常がないので安心してゐる、と述べられています。

ることからわかります。しかし、信吉は慶長十九年(一六一四)改易となり、信州深志(松本)の小笠原家にお預けの身となります。それから、二十年後の寛永十一年(一六三四)七月、信吉は(謀反これ無きよし上聞に達し)赦されますが、江戸へ帰る途中発病し、同月十五日、浅草寺の月祥院で亡くなったと伝えられています。しかし、幸いなことに子の久綱・公當の両名が旗本として取り立てられ、家名が存続します。

では、先の三通の文書が、どうして津布久家に伝来したのでしょうか。「津布久系図書」によると(右三通、寛永十一年甲戌正月五日拝領ス)とあります。つまり、佐野家に

仕えていた先祖が、旧主から戴いたものと思われます。主家再興に尽くした礼なのでしょう。

図4は、久綱から数えて七代目の当主義行が描いた布袋図です。義行は大和国高取藩主植村家道の三男で、安永二年(一七七三)四月佐野家を継ぎ、大御番頭や西の丸御側衆など、旗本として最高の役職に就いています。また、書画に堪能であったことでも知られています。



図4 布袋図 (イ、30)

小金井市の海岸寺門前に、道路を隔てて玉川上水が流れています。この堤が江戸時代以降、花の名所として知られた小金井堤で、傍らに文化七年(一八一〇)記銘の「小金井櫻樹碑」が建っています。碑の篆額を揮毫したのが、ほかならぬ佐野義行なのです。

津布久家には「布袋図」のほか、鯉や亀を描いた義行の作品が残されています。

(京谷 博次)